

平成二十八年一月一日発行 第二十六卷第一号 通巻第二九五号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成28年1月号

岡井省二創刊



# 闇汁のレシピ

高橋将夫

シベリアの白に染まりて鶴きたる

秋の灯に影を積み上げ古本屋

呉服屋の秋の風鈴ひそと鳴る

本性は純白なりし曼珠沙華



イカロスの翼を濡らす秋時雨  
おのづから穴は見つかる穴惑  
闇汁のレシピを作るごときかな  
息長く続ける秘訣とろろ汁  
まつ直ぐに歩く者なし茸狩  
鰯飛んでをり大海も大会も  
顔と名が合うて夜長の宴かな

「権二十四周年全国大会」句



# 槐安集

水野恒彦

中島陽華



鶴来る未明のひかり纏ひつつ  
純白の蝶を匿ふ真葛原  
背高泡立草この世の外れかな  
鏡の奥に黄落つづき晩学す  
朴落葉拾ひて山の深さ知る

岡井倉二先生

加藤みき

長月の駆け抜けてゆく木の葉かな  
菊枕せむと乾ぶを待つてをり  
秋蝶のけだかきまでに黄色かな  
妣が家の葭戸蔵はれぬたりけり  
焼芋とコーヒー確と相和して

うなぎ屋の奥までずいと水の秋  
澄み声の赤前垂の秋夕焼  
豆洗ふ音はマラカス夜の秋  
紅葉狩ちりめんの袖ひるがへる  
藁纏ふ亀は池へと放生会

竹内悦子

心経や松に触れをる鱗雲  
穴惑ひこの世の五欲持ち帰る  
大手門くぐりて紫式部かな  
月光や石にはりつく蠱斯  
银杏を拾ひし影と日向かな

雨村敏子

みささぎを貝塚を越え鳥渡る  
枯色の海に迫りぬ遍路みち  
石舞台枯野のいろを畏みぬ  
通草笑うて山の日が体ぢゆう  
鶉色にわれを染めたり大花野

本多俊子

鷹渡るとき海の空生き生きす  
秋の蝶草の彩もて漂へる  
人間に近きにほひのをみなへし  
山影の水にありけり秋惜しむ  
水神にきて色鳥に空深し

近藤喜子

鳥の声する方に向き熟るる茱萸  
鶉のこゑ金色の輪となり降り来  
おほらかに芦の絮とぶボヘミアン  
夕空の闇へと倒る鶉の声  
ひつそりと朽木はなやぐ月夜茸

瀬川公馨

秋出水猛り猛りて出口なし  
斜が似合ふ湯殿の前の紫苑かな  
けふはどちらへ頬ふくらませ赤のまま  
入月やカラザのこゑをきくとせむ  
蕭白の野馬凶屏風の遊びかな

久保東海司

木の実落つ闇の深さを測るごと  
帯塚を飾る 回向の菊新た  
夕映えて穂を染めし 芒かな  
焚けば香の焚かねば色の残る菊  
豊年に招かれ祝ぎの盃を受く

柳川 晋

オーロラを孤火ど呼ぶ森の人  
古酒ほどの者にはあらずひやおろし  
まつろはぬ神も一緒に踊りけり  
ハロウインの化粧が残る案山子かな  
メドウーサの首の在り処へあなまどひ

熊川暁子

逢へさうな気がして今日の花野かな  
月今宵寝そべるうさぎ遅るるな  
幾年の露置き来たる無縁仏  
ジヨギングに出かけて月の客となる  
神の留守鍵かけたよな掛けぬよな

寺田すず子

白雲を分け大海へ月の舟  
残照の東に 赤い月昇る  
ときどきは笑つて見たし新松子  
嘯きし自然薯掘りの顔ゆるむ  
頂上の霧がうがうと流れをり  
スパームーン

岩下芳子

秋の燈や一頭分の鞆し革  
曼珠沙華葉の一枚も持たぬ主義  
川上へ薄なびいてをりにけり  
新調の眼鏡で見たる文化の日  
夕空や千の椋鳥右往左往

近藤紀子

秋うららトーマス電車止まりける  
かつぼれかつぼれ稲雀囃しけり  
神域の蔦の紅葉やことのほか  
木犀の香りの夜となりにけり  
かぐや姫の衣擦れの音良夜かな

岩月優美子

ミュシャの絵の流るる髪に秋思あり  
どの道もきざはし多し黄落期  
火の山の鎮魂に色づく紅葉  
世の風に瓢瓢として糸瓜かな  
仏手柑の影を残して昏れにけり

竹中一花

足揃へ時代祭の一步かな  
野ざらしを匿す枯草金色に  
桂川と識らずに越すや紅葉山  
百万遍唱ふ念佛秋惜しむ  
閻王の萩を散らすや龍の風

# 槐市集

有松洋子

ほぐれゆく心の凝りや金木犀  
朝風にふるへる紅葉いのち愛し  
秋ともし亡父の椅子に兄の坐し  
冬隣星の光度の深くなり  
冷まじや隠れ平氏のかづら橋

犬塚李里子

翼灯にかかりさうなる冬北斗  
露けしや衣桁にかかるもの多し  
群れ来ては群れ去る鯉や水の秋  
結界を出でず翔び交ふ秋茜  
山に入り寒露の水を飲みにけり

井上静子

畑に出で何はともあれ菜虫取る  
剃髪の雛僧生れし実南天  
秋寒しベストのファスナー布を咬む  
傘たたむ狐日和の秋の虹  
道草の実笑いすぎたる頬の紅

今井充子

秋のこゑ菩薩の慈心たまはりて  
はらはらと気象のゆくへ秋出水  
秋の蚊や荷を持ち替へて払ひける  
風呂桶の糸瓜に尻糸付いてぬし  
瓢箪の錆は祖父の趣つたへをり



江島照美

衣被天こ盛りして若女将  
クレインの突き刺している鱒雲  
秋祭負けちやならないハロウインに  
天ぷらの紅葉食みつつ紅葉狩  
共に行くそれが宿命鳥渡る

前田美恵子

秋澄むや天下要の甲府城  
初紅葉大手門と差し掛る  
十月の聖護院に風渡る  
初鴨のひと打賀<sup>か</sup>茂川<sup>も</sup>の波立てる  
しあはせの数珠を繰りをる芋煮会

安野眞澄

魯田の水に写りぬ雲の柄  
山粧ふ梵鐘の音透きとほる  
誤字一つメールにありし夜長なる  
雨上り紅葉もみじの深山かな  
深秋の青さ広がる棚田かな

柳橋繁子

ひよんの実に穴ふたつあり敷島よ  
甘樫の丘の夕映え実葛  
入相の鐘や大和の柿紅葉  
山里の人より多き案山子かな  
方寸<sup>白鳳展</sup>の銀の舍利壺秋彼岸

山田佳子

十六夜や雑木林の隙間より  
コスモスや子らの遊戯はたけなわに  
峠茶屋割箸太し新豆腐  
実石榴や路地に並べし陶器市  
雨だれの調子乱して木の実落つ

吉田順子

鳴くちちろ闇やわらかく詩行脚  
夕闇の木犀の香に立ち止まり  
全容を湖へ展げて秋の山  
赤とんぼ雲より湧きて来るごとし  
蛇入れて山ほつこりと眠りけり

# 槐集

## 高橋将夫選

愛の羽根愛の行方を問うてみる 大阪 江島 照美

冷まじや頷きつつも嘘を吐く

色変へぬ男松女松の情深き

金木犀女の行きし後追うて

鹿鳴くや孤高は遠くあるものよ

針突けば割れると思ふ秋の空

この国の背筋にひそむうそ寒さ

地獄極楽岐れ道には曼珠沙華

独りには独りの甘美熟柿かな

沼に棲む龍はわが考夕紅葉

蔓梅擬なだるるあたり山の声

星飛んで大きく坐る山の影

鬼やんま日のさざなみを颯と飛び

神々の目覚めの色に通草の実

黄葉大樹そは歓喜とも悲哀とも

岡崎 吉田 順子

有松 洋子

敗荷の終の色なす夢の中 岡崎 柴田 靖子

二度とかへらぬ一瞬を秋の虹

星流る熱き血流るつなぐ手に

まぼろしの目捷にあり秋麗

背の闇にあまさず吹きし秋の風

十界に身を置きたるやとろろ汁 寢屋川 前田美恵子

忠誠を誓ふ碑草の花

信玄の城跡

ぞんざいに扱ふなかれひよんの実を

身に入むや空仮中の石切場

鬼灯の彩づき省二の笑顔かな

空仮中＝仏語で輪廻転生の意

蛇穴に入るを忘れし巫女の舞 岡崎 犬塚李里子

ひとひらの雲のたゆたふ展墓かな

いま負へるもの降ろしたし鱗雲

笙の音や夜(よる)顔の風透き通る

満月に捧げてみだし一行詩

# 銀河往来

## 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

愛の羽根愛の行方を問うてみる

江島 照美

善意の募金がどんな人々のもとに届いて役立ったのか、たとえわずかな額であったとしても気になるところである。一口に愛と言っても種々あるが、どんな愛にせよその行方は気になるものようだ。

〈鹿鳴くや孤高は遠くあるものよ〉の句のように、孤高の人は普通の人々にとつてみれば遠い存在。例えば、遠くで鳴く鹿の声もとどかぬほどに。

〈冷まじや顔きつつも嘘を吐〉の句は人の世の機微を、〈色変へぬ男松女松の情深き〉の句は男女の機微を巧みに捉えている。季語の「色変へぬ松」の本情を「男松女松」にまで拡張した着想は見事。

針突けば割れると思ふ秋の空

有松 洋子

澄みわたる秋天を「針で突けば割れる」と詠んだ感性が実に新鮮に感じられた。

〈この国の背筋にひそむうそ寒さ〉の句の「背筋にひそむ」も作者ならではの表現。〈地獄極楽岐れ道には曼珠沙華〉の句の「曼珠沙華」に「地獄」が出てきても驚かないが、「地獄と極楽の別れ道に咲く」は作者ならではの発想。

〈沼に棲む龍はわが考夕紅葉〉の句には、大きな存在だった亡き父への思いが込められている。

黄葉大樹そは歓喜とも悲哀とも

吉田 順子

銀杏の黄葉には紅葉とはまた違った美しさがある。そして、見る人により、見る状況により歓喜にも悲哀にも見えるのだ。〈星飛んで大きく坐る山の影〉の流星と不動の山の対比、〈神々の目覚めの色に通草の実〉の「神々の目覚めの色」も作者ならではの感性。

星流る熱き血流るつなぐ手に

柴田 靖子

「つないだ手を流れる熱い血潮」に配合された「流れ星」が不思議な物語の世界を構築している。

〈敗荷の終の色なす夢の中〉の「終の色」の敗荷の夢もへまほろしの目睫にあり秋麗の「目睫の幻」も作者ならではの幻想の世界。△二度とかへらぬ一瞬を秋の虹は秋の虹の本質を突いている。

ぞんざいに扱ふなかれひよんの実を

前田美恵子

瓢の木はマンサク科の常緑高木蚊母樹（いすのき）の別名。その木の葉に生じた虫こぶがひよんの実で、鶉の卵ぐらいの大ききになる。でも、虫こぶだからといってぞんざいに扱うべきでない」と作者は言う。ひよんの笛といわれるように、吹けば笛のように鳴るのだ。

蛇穴に入るを忘れし巫女の舞

大塚李里子

冬眠の蛇が穴に入るのも忘れるほどというから、よほど素晴らしい巫女の舞だったのだろう。

〈いま負へるもの降ろしたし鱗雲〉は作者の偽らざる今の心境。秋空に広がる鱗雲に救われる。〈以下略〉